



.....
 監督・脚本・製作＝ジョエル・
 コーエン&イーサン・コーエン
 /出演＝トム・ハンクス/イル
 マ・P・ホール(ブエナ ビス
 タ インターナショナル<ジャ
 パン> 配給/2004年アメリカ映
 画/104分)

個性豊かな「4人組」の窃盗団を率いるのは、トム・ハンクス扮するインテリ教授。夫に先立たれた一人暮らしの老婦人から、紳士然とした風貌と巧みな話術で地下室を借り受けた教授たちは、地下トンネルを掘ってカジノ船の地下金庫へ。「みごと成功！」となったが、予想外のミスがミスを生み……？ 最後に笑うのは、果たして教授か、それともマダムか……？ アッと驚く意外な展開には、思わず苦笑いが……。

🎬 ちょっと誇大宣伝(？)

この映画の面白さを最も適切に表現したキャッチコピーは、「最後に笑うのは、マダムか？ 教授か!?!」。これはすごくいい。しかし、「映画という名の 完全犯罪」「犯罪史上最高の頭脳が、ついに宿命のライバルをみつけた。その名はマダム・マンソン—虫も殺さぬ老婦人」は、ちょっと……？

前者は、そもそもどんな意味かわからない(?)し、後者は、教授とマダムは別にライバルでも何でもない。したがって両者とも、ちょっとワケのわからない、誇大宣伝(?)のキャッチコピーと言わざるをえない。

🎬 やめてほしい「原稿棒読み」の映画紹介

さらに、試写会で上映前に流された女性アナウンサーによる「原稿棒読み」の映画紹介がいただけない。パンフレットの中の文章を適当にパクってつないだだ

けの文章になっているのは許せるとしても、読んでいる本人がわかって読んでいるのか！ と言いたくなるような棒読み……。彼女は、「映画という名の完全犯罪」という言葉を、一体どんなイメージをもってマイクに向かって話しているのだろうか？ また、「ひねりの効いた新しいクライム・ストーリー」と言われても、何のことかわかる「日本人」は少ないはず。パンフレットを読んで、クライム＝crime＝犯罪という思考経路を経てはじめてわかるのでは……？

マダムは敬虔なクリスチャン

夫に先立たれ、愛猫ピクルスとともに1人家を守っているマンソン夫人（イルマ・P・ホール）は敬虔なクリスチャン。壁に掲げられた大きな夫の写真といつも対話しながら、神の教えを忠実に守ろうとしている。もちろん教会通いは定着した習慣。ある日、こんなマダムの家のチャイムが鳴った。

トム・ハンクスは天才（？）教授

「空き部屋あり」の看板を見て、マダムの家を訪れたトラディショナルな英国風の紳士がトム・ハンクス扮するゴースウェイト・ヒギンソン・ドア教授。彼の申出は居住用の部屋を借り受けることだが、それと同時に教会音楽の演奏練習のため、地下室を見せてほしいと要請。敬虔なクリスチャンで、「ポップ・ミュージック」を嫌悪しているマダムとしては、「ルネサンス時代の教会音楽の完全再現」を練習するためと言われたら断われない。やがて奇妙な「楽器」とともに、地下室には教授を含めた5人の男たちが入り込むことに……。

教授の狙いと教授が率いる個性豊かな4人の男たち

地下室での演奏練習の初日。テーブルには楽譜ではなく、地図が広げられた。そして教授の口からは、カジノ船の地下金庫からの現金強奪作戦の説明が……。その手段は意外に単純。すなわち、地下トンネルを掘って金庫までたどり着くというものだ。その実行部隊は次の4人の男たち。第1は潜入・偵察のエキスパートのガウェイン（マーロン・ウェイアンズ）。第2はトンネル掘りのエキスパートの将軍（ツイ・マー）。第3は爆発物のエキスパートのパンケイク（J・K・シ

モンズ)。第4は格闘のエキスパートのランプ（ライアン・ハースト）。

5人の窃盗団のチームワークは？

第1から第3の人物は必要不可欠だが、第4の人物がなぜこの完全犯罪の遂行に必要なのかは少し疑問……？ それはともかく、この4人はとにかく個性豊か。ということは、裏から言うと、その統制をはかるのが難しいということ。

将軍とランプは黙って仕事をするだけだから、あまり問題はないものの、コトある(?)ごとに対立するのがスラングを連発する若い黒人のガウェインと、北部で黒人解放運動をやったのに、これを率直に認めてもらえないことにイラつくパンケイク。もっとも、パンケイクが自分の彼女に計画を漏らし、グループに引っ張り込んだことは、5人の確約事項に反する行為で、大人気ないから、非難されて当然だが……。他方、マダム殺害について、最も平等なクジ引きで当選(?)したガウェインが、「お袋を思い出して、どうしても殺せない。もう1度クジ引きをやってくれ」と懇願するのは、アメリカ流民主主義に反するし、女々しいと非難されてもやむをえない。それにしても、こんな4人の男のチームワークを保って、現金強奪作戦を指揮していく教授は大変だ……？

圧倒的なゴスペルの迫力

この映画のもう1つの主役は、圧倒的迫力を見せるゴスペル。マダムが通う教会の中は、いつも見事なゴスペルが響きわたっている。そのシーンが登場するのは、教授がトンネルを爆破するため、マダムに家をあけさせた時とラストの2度の場面。歌のタイトルや言葉の意味はわからなくても、その黒人特有の歌声だけで圧倒される。パンフレットによると、かなり有名な曲とのことだから、ゴスペルのお好きな人は、さらに詳しくリサーチすれば楽しいかも……？

絶妙のカメラワークを見せる冒頭シーン

映画の冒頭は、「ゴミの島」へ向けてゴミを満載した船がゆっくりと川を進んでいくシーン。そしてこれを見下ろす橋の上に見えるのが1本の欄干。この橋の下をゆっくりとゴミ船が下っていくシーンの意味は、映画の進行の中でブラック

ジョークのようによくわかる。そしてまた、1本の欄干の特別な意味も……。

陰の主役はエドガー・アラン・ポー

「少年探偵団」や「明智小五郎」で有名な作家・江戸川乱歩は、「推理小説の父」と呼ばれる19世紀のアメリカ作家エドガー・アラン・ポー（代表作は『黒猫』など）をもじったのは有名な話。

ルネサンス時代の教会に造詣の深い教授は、当然こんなエドガー・アラン・ポーが大好きだ。マダムが友人たちを招いた席で、中世音楽の演奏に代えて、教授が朗読したのも、エドガー・アラン・ポーの『ヘレンに』という詩とのこと。その朗読のすばらしさに観客はウットリ……。また最後の男たちの争い(?)の中、橋の上で教授が欄干の上にとまったカラスを見つけて、嬉々として「Raven(大カラス!)」と声をあげるシーンが登場するが、このシーンの意味はエドガー・アラン・ポーの作品を読んでいなければわからないもの……?

喜劇役者! トム・ハンクス

この映画は、前半と後半で大きく物語の構成が分かれている。すなわち、前半はカジノの金庫からの現金強奪作戦の実行とその成功をスリリングに描く物語。そして後半は、「この男たちは怪しい!」と察知したマダムを殺害するために始まった、マダムと男たちとの「対決(?)」を描く物語。

このように、前半と後半で大きく分かれる物語の展開の中、前半は、教授がマダムをいかに騙しながら完全犯罪を成功させるかがテーマ。そして後半は、チョロイ(?)はずのマダム殺害がなぜかうまくいかず、逆に、次々と男たちが死んでいくストーリー。そして何と、最後には……? 思わず声を出して笑ったり、苦笑い(?)してしまうほど、屈強な男たちとマダムとの「対決」は面白い。

そして前半、後半を通してこの映画の楽しさを支えるのはトム・ハンクスの演技。紳士然とした物腰やインテリジェンス溢れるしゃべりは「さすが、天才教授(詐欺師!)」と声をかけたくなるほど。もっとも、そのあっけない「最後」には思わず口がアングリ……? 喜劇役者(?) トム・ハンクスの面白さを存分に楽しむことができる好作品だ。

2004(平成16)年4月21日記